

18世紀のベトナム南部における銭貨鑄造と流通 —鄭氏銭の東南アジア地域への拡大—

阿部 百里子

昭和女子大学国際文化研究所 客員研究員

緒言

18世紀初頭、南部ベトナムに鄭氏（広東系華人）が入植、開拓を開始した。当時中南部ベトナムを実質的に支配していた広南阮氏は鄭氏を臣下とみなし、河仙（ハティエン）鎮の鎮守として帰属させたが、鄭氏は、西洋の国々に対しては「カンカオ」、清に対しては「港口国」、江戸幕府に対してはカンボジア王などと自称し、独自に銭貨を鑄造し、18世紀末のベトナムの内乱により鄭氏が滅ぶまで、積極的な外交や国際貿易活動を展開していた。

本研究は、南部ベトナムの鄭氏支配地域における銭貨の基礎的調査により、これまで文献史料からのみ語られてきた当該地域の歴史研究に対し、具体的な遺物としての考古学データを提供する研究であり、鄭氏の国際交易活動や外交活動をアジア海域交易ネットワークに位置づけ、その役割を明らかにすることを目的とした考古学研究である。

方法

本研究は、鄭氏の拠点地域における考古学研究であり、ベトナム南部のキエンザン省ラックザー及びハティエン、フーコック島において博物館資料調査及び遺跡踏査を実施した。またインドネシアにおいても銅銭の使用に関する調査を実施した。

具体的な遺物を扱った調査研究では、ベトナム南部メコン河デルタの中州にある都市ベンチエー省で2006年に発見された一括出土銭（非常時などに備え、財産としての大量の銅銭を壺に詰めて土中に保管していたもの）の考古学的調査を実施した。

以下に実施した一括出土銭の調査方法を概略する。なお、文化財は、国外へ持ち出すことはできないため、①～⑤まではベトナムで実施した。

①銭を一枚ずつ金ブラシやヘラなどの工具でこすって錆を落とす。②銭銘や鑄造地、年代を確認し、同種類ごとにケースにまとめて分類、枚数をかぞえる。③銅銭を

スキャナーで読み取りデジタルデータとし、寸法・重量を計測し記録する。④銭種ごとに数枚選び、表裏両面の拓本をとる。⑤銭貨が入っていた壺を記録する。⑥図面や拓本、記録データなどを整理し資料化、統計処理を行う。

結果

キエンザン省博物館において、銭貨や陶磁器などの出土遺物や、沈没船引き揚げ遺物の基礎的調査を実施した。この地域の沈没船では15世紀代のタイの陶磁器が引き揚げられているが、近年は18世紀代の中国陶磁器が漁民によって多数引き揚げられていることがわかった。ベトナム南部に入植、開拓を開始した広東系華人鄭氏の交易を考察するうえで重要な資料と位置付けられる。また、ハティエンでは18世紀のレンガ窯が多数発見されており、開拓に伴う都市建設に関連すると思われる。その分布域を今後調査することで、鄭氏の勢力圏を知ることができよう。

フーコック島では、博物館所蔵の伝世品の中で日本の肥前磁器碗を発見することができた。17世紀中ごろに盛んに輸出された荒磯文碗であり、この島に直接運ばれたものとは断定できないが、南シナ海交易ネットワークの中で運ばれたものといえよう。

また、本研究においては、ベンチエー省フックミーチュン村の畑の中で発見された一括出土銭（以下S1資料とする）の調査を実施した。総重量は50kg、総数は23,989枚、うち制銭は23,427枚、私鑄・不明銭は562枚であった（図1）。制銭の最新銭は、阮朝の明命通寶（1840年初鑄）であり、出土した阮朝の銭貨はすべて鉛銭であった。最多は阮朝の嘉隆通寶（1802年初鑄）で11,660枚、次いで景興銭が5,439枚、明命通寶が4,480枚であった。また日本の元豊通寶（長崎貿易銭、初鑄：1659）が22枚含まれる。

私鑄銭は、鄭氏銭が鑄造した安法元寶（1736年初鑄）が127枚と最多で、次いで太和通寶が94枚、聖元通

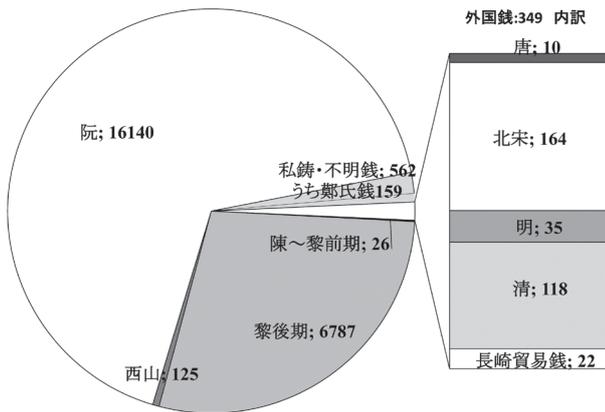


図1 S1資料 時代別組成

寶が65枚であった。

考察

ベトナムの歴史において最初に鑄造された錢貨は、丁朝（968年）の「太平興寶」であり、以降、ベトナム最後の王朝阮朝の保大帝までの各王朝では方孔円形の錢貨を鑄造、使用すると同時に、中国錢や日本錢も流通していた。ベトナムの史書『大越史記全書』では、1460年代から私鑄や撰錢を禁ずる記事がみられるようになり、私鑄錢が相当量流通するようになる。

17世紀中頃には、ベトナム全土で錢不足となり、その時供給されたのが日本の銅や銅錢であった。1728年に中国に奪われていた聚龍銅山が返還されると、北部の各地に次々と錢場が開かれ、景興錢が大量に生産された。本研究で調査したS1資料にも5,439枚含まれ、全体の23%を占める。中、南部の錢貨流通状況は、『大南寔録前編』や『撫辺雜録』の記事に詳しく、17世紀前半より広南阮氏によって小型の太平錢が作られ始め、1736年には南部で粗製の鄭氏錢の鑄造が開始し広南阮氏政権に納められていた。それが安法元寶でありS1資料には159枚含まれ、私鑄錢の1/3を占める。1746年になると広南阮氏自身が垂鉛錢の鑄造を開始するが、それはすぐ質の悪い鉛錢へと変化していく。1771年に蜂起した西山党の乱により広南阮氏は南部へ亡命し、1776年より鄭氏によってフエでも景興錢の鑄造が開始される。1802年に阮朝が成立し、ベトナム全土を統一すると多数の錢貨を発行するようになるが、鉛錢がおおかったことがS1資料の調査成果から想定できる。

S1資料と同時期の一括出土錢として、筆者がこれまで北部及び中部ベトナムで参加、実施してきてきた北部1号資料（以下N1資料とする）、中部2号資料（以下

N2とする）の調査成果と比較する。

N1は29,000枚の錢貨を調査し、最新錢は嘉隆通寶である。87%がベトナムの制錢で、景興通寶が最多で23,038枚であった。中国では雲南で鑄造された清朝錢や吳三桂の錢貨、寛永通寶や長崎貿易錢が含まれる¹⁾。C2資料は、1,205枚の錢貨を調査し、最新錢は景興通寶であり18世紀中頃に埋められたと考えられる。北宋錢が半数、私鑄錢が1/3を占めた（図2）。最も多かったのは清朝の康熙通寶（初鑄:1662）で147枚、次いで北宋の元豐通寶が121枚であった。日本錢はすべて元豐通寶である。私鑄錢は、錢銘が多様で安法元寶が91枚と最多で、次いで元豐通寶、治平聖寶と続く²⁾。

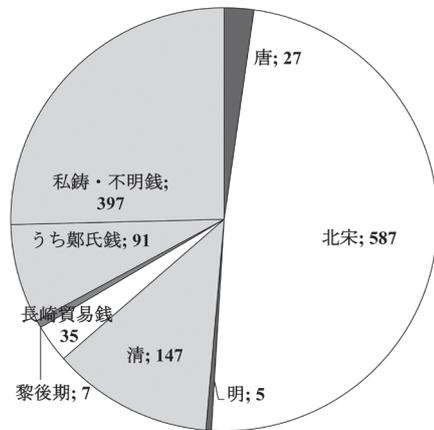


図2 C2資料 時代別組成

N1、C2ともに錢銘ではS1と状況が似通うが、私鑄錢を比較すると、N1ではわずかに十数枚で1%に満たないのに対しC2では1/3を占める。N1資料を分析した三宅氏は、ほぼ同時期でありながら私鑄錢のみをいれた資料も存在することから、制錢と私鑄錢が二重構造の貨幣経済で使い分けられていたと考察しており、中部では粗悪な錢貨も備蓄対象の錢であり、使い分けられていなかったことがわかる。中部では北部と異なる流通状況があったのだろう。『撫辺雜録』は18世紀後半の中部の状況について、小型錢が流通しており、通常の錢の1/3の価値であると記されている。小型の私鑄錢は、少額貨幣として使用されていたと考えられる。また、N1、C2資料中に鉛錢は見られなかったが、S1では銅錢と鉛錢が同じ壺に容れられて発見されており、かつ鉛錢が67%を占めたことから、南部では鉛錢の使用は一般的で、備蓄の対象となっていたことがわかる。

N1、C2、S1の何れの資料にも私鑄錢の中に「元」の字のみを篆書で記す錢種のグループがある。このグ

ループの元の書体には統一した特徴があり、同一勢力・地域の鑄造が想定できる。鄭氏が鑄造した安法元寶もその一種であり、鄭氏あるいは南部ベトナムに入植した華人勢力による鑄造が想定できる。これらの銭貨はインドネシアのバリ島でも多数確認されており、それは銭貨としてではなく祭祀において使用されていた。

インドネシアでは、18世紀にコショウ貿易で栄えたジャワの港市国家バンテンにおいて中国系銭を模した銭貨が鑄造されている。それは円形有孔ながら孔が六角形で周囲にジャワ文字で王名を配した、バンテン銭である。中国系銭と同じ大きさの銅銭とそして小形の鉄・錫銭が鑄造されていた³⁾。しかし、この銭貨はベトナムでは一点も出土していない。1596年にバンテンに渡来したオランダ人は、コショウ貿易などの経済活動での基本的な交換具は中国系銭であると記し万曆通宝の図を示している。インドネシアにおいては、国内流通用の銭貨と外国貿易用の銭貨が分けて使用されていたと想定できる。そして、その外国貿易用の銭貨の中で鄭氏銭も使用されていたのだろう。

まとめ

本研究において、鄭氏が拠点としていたハティエン及びその周辺地域で発見された銭貨の調査を実施することができ、鑄造と流通・使用に関する考古学的基礎データをえることができた。鄭氏が独自に鑄造・発行していた各種の銅銭は、ベトナム各地及びインドネシア、日本の18世紀以降の遺跡において発見されている。本研究で調査したS1資料には、薄くて小型の貨幣が多数確認され、鄭氏銭の銭種の考察に有効な資料を多数得ることができた。そしてそのような低質な銭貨が通用した地域はどこまで広がるのか、18世紀段階の南シナ海交易世界におけるベトナム南部の位置づけを考えるうえで興味深い。

ベトナムにおける一括出土銭の調査は、現在も継続中である。ベトナム全土の中・近世における銭貨の使用、流通実態があきらかになることで、東アジア世界と東南アジア世界とを繋ぐ銭貨流通圏としての比較研究が可能となろう。

要 約

本研究では、鄭氏が拠点としていたハティエン及びその周辺地域で考古学調査を実施した。鄭氏はハティエンおよびフーコック島一帯を拠点に活動していた。そして、独自の銭貨を鑄造しており、インドネシアでも発見されている。これらの銭貨とともに、南部ベトナムでは中国銭、日本銭、ベトナム銭、鉛銭などが一般的に流通していたことがわかった。

謝 辞

本研究の遂行にあたり、公益財団法人三島海雲記念財団より学術研究奨励金を賜り、海外での現地調査を遂行することができました。また、ハノイ国家大学、ベンチエー省博物館、キエンザン省博物館、インドネシア考古学センターの研究者各位には、現地調査の実施にあたり多くのご協力をいただきました。ここに記して篤く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 昭和女子大学国際文化研究所：昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.12 ベトナム北部の一括出土銭の調査研究、pp.14 - 83、2009
- 2) 阿部百里子ほか：東南アジア古代・中世考古学の創生、鹿児島大学、pp.83-89、2013
- 3) 坂井隆：日本考古学協会第79回総会研究発表要旨集、2013